

# 「去年奈良のもみじを由美と見た」にみる

## イントネーションの地域差

### —岡山と香川の比較—

轟 木 靖 子

#### 1 はじめに

本研究は、岡山方言と香川方言のイントネーションについて、どちらの方言でも同じアクセントで発音される語からなる文の音声資料を分析し、両方言の特徴をあきらかにする。

郡(2004a)では、秋田市、東京、名古屋市、大阪市、高知市、広島市、福岡市の7地点を対象に、「去年奈良のもみじを由美と見た」という文の、すべての文節を頭高型のアクセントで発音する若年層話者の発話を収集し、声の高さに関係するF0(基本周波数)および持続時間等の特徴について検討した。その結果、(1)「奈良のもみじを」におけるF0変動幅、(2)「もみじを」と「見た」のアクセント弱化の程度、(3)「奈良の」と「由美と」のF0ピークの位置(第2モーラ始点との位置関係)、(4)文全体の長さ(発話速度)の4点を、地域差を特徴づけると考えられる指標として取り上げた。この結果をふまえ、本稿では、同じ文を利用し、岡山方言話者4名と香川方言話者6名の発話データについて、各文節および文節間のF0変動幅と、「奈良の」と「由美の」におけるF0ピークの位置を観察し、それぞれの特徴と考えられる点について述べる。

#### 2 各地の方言のアクセントとイントネーションの特徴について

岡山県と香川県は瀬戸内海を挟んで向かい合う形に位置しているが、方言のアクセントは両者で異なる。岡山県を含む中国地方は東京式アクセント、香川県を含む四国地方は京阪式アクセントのグループに分類される(注1)。京阪式アクセントは日本の歴史上長期にわたり都のあった京都を中心としたアクセントであり、歴史的に古く、また型の区別や音調の特徴も東京式より複雑である。香川大学の学生は、香川県出身者も岡山県出身者も相当数いるが、高校まで岡山で生活し大学入学後はじめて香川に来た学生は、香川の言葉を聞いて「関西弁のようだ」と感じたという学生が少なくない。香川の言葉は、実際に京阪地域で話されている音調とはかなり違うものの、文末形式のヤのような言い方も含めてそのように感じられやすいと考えられる。

また一般的に、「奈良のもみじ」のように連続する二つの文節が意味上の限定・被限定の関係にあるときの後ろの被限定の文節(この場合は「もみじ」)のアクセントが弱化し、単独で発話したときに比べて音調の山が低くなる傾向があるといわれているが、京阪式アクセントの地域である大阪

方言話者は、このような弱化の傾向が東京方言話者に比べて弱く、文の中においても一つ一つの語アクセントを実現させようとする傾向が強いと言われている(注2)。また、郡(2004a)では、「去年奈良のもみじを由美と見た」の発話において、他の地域にあまりみられなかった大阪方言話者の発話の特徴として、「奈良の」のF0ピークの位置が第1モーラ内にあるケースがあった点をあげている。ただし、同論文の調査では同じ京阪式アクセントの地域である高知の話者についてはそのような特徴はみられなかったという。

本研究では、同じ文を音読してもらった発話資料について同様の分析をおこない、上記の特徴2点、すなわち文における文節アクセントの弱化と「奈良の」「由美と」におけるF0ピークの位置についてどのような傾向があるかについて、大阪方言話者の特徴と思われる点と照らし合わせて考察する。

### 3 録音調査の概要

#### 3.1 調査の方法

言語形成期を岡山県で過ごした学生4名と香川県で過ごした学生6名について「去年奈良のもみじを由美と見た」の文を音読してもらい、録音した。調査時期は2019年11月、被調査者は全員女性で20～30代である。各地域の方言アクセントをどのくらい保持しているかを見るために、2拍名詞第一類から第五類および3拍名詞第一類から第七類の名詞およびそれらを含んだ文の読み上げ、また「奈良のもみじを見た」「去年奈良のもみじを見た」についても読んでもらった。本稿では考察の対象としないが、比較のため「奈良の」を「奈良で」に変えた文についても読んでもらった。調査語彙および調査文を以下に示す。録音の際は同じ文について2回ずつ繰り返してもらった。

(水槽に)「鰻が…」のような文については「いる、ある、おる」の中から普段自分が使うものを選んでもらった。調査語や文はB6版のカードに三つ程度を目安に印刷し、調査前にあらかじめ見てもらってからおいてからボイスレコーダ(TASCAM DR-07)により録音をおこなった。カードは全部で12枚、調査時間は約15分程度であった。

#### 調査項目

##### ■ 2拍名詞

鼻が赤い	鼻
音が聞こえる	音
花が咲いている	花
松が見える	松
雨が降る	雨

##### ■ 3拍名詞

車	車がある
鯛(いわし)	(生簀に)鯛がいる／おる
扉	扉がある
小豆	小豆がある
鮑(あわび)	(水槽に)鮑がいる／ある／おる
小麦	小麦がある
鏡	鏡がある
林	林がある

涙	涙がある
油	油がある
鰻(うなぎ)	(水槽に)鰻がある／いる／おる
雀(すずめ)	(庭に)雀がある／いる／おる
鯨(くじら)	(水族館に)鯨がある／いる／おる

■文イントネーション

奈良のもみじを見た。

奈良でもみじを見た。

きょねん奈良のもみじを見た。

きょねん奈良でもみじを見た。

きょねん奈良のもみじを由美と見た。

きょねん奈良でもみじを由美と見た。

3.2 調査結果

音声資料については、F0分析ソフト「音声録聞見」(注3)を使用して分析をおこない、文節ごとのF0最大値とその差、および「奈良の」「由美と」のF0ピーク(最大値を示す時間軸上の位置)について計測した。その結果を表1、表2に示す。被調査者については岡山方言話者はOK、香川方言話者はKGとし、01から順に番号をつけている。

各発話の文節ごとのF0最大値と、「去年-奈良の」「奈良の-もみじを」「去年-由美と」のF0最

表1 各文節の最高F0値と文節間の比較(100Hzベースst換算)

項目 被調査者	きょねん	ならの	もみじを	ゆみと	みた	きょねん- ならの	ならの- もみじを	きょねん- ゆみと
KG01 (1)	16.5	17	16	16.5	11	-0.5	1	0
KG01 (2)	19	17	15.5	16	11	2	1.5	3
KG02 (1)	18	16	14.5	16	11.5	2	1.5	2
KG02 (2)	18	16	14	17	11	2	2	1
KG03 (1)	18	17	13.5	14	10	1	3.5	4
KG03 (2)	18	15.5	13.5	13.5	11	2.5	2	4.5
KG04 (1)	16	15	13.5	15	10.5	1	1.5	1
KG04 (2)	17	16.5	14.5	16	10.5	0.5	2	1
KG05 (1)	18	13.5	11	11	7	4.5	2.5	7
KG05 (2)	20	11	12	13	7	9	-1	7
KG06 (1)	20	19	16.5	15	10.5	1	2.5	5
KG06 (2)	20.5	20	15.5	15.5	10.5	0.5	4.5	5
OK01 (1)	19.5	16	14.5	14.5	10	3.5	1.5	5
OK01 (2)	19	16	14.5	15.5	10.5	3	1.5	3.5
OK02 (1)	19.5	18.5	14.5	15.5	10.5	1	4	4
OK02 (2)	20	18	14.5	16	11	2	3.5	4
OK03 (1)	20	18	15.5	15.5	12	2	2.5	4.5
OK03 (2)	20	18.5	15.5	15.5	12	1.5	3	4.5
OK04 (1)	18.5	18	15.5	17	11.5	0.5	2.5	1.5
OK04 (2)	18.5	18.5	15	17	11.5	2	3.5	3.5

(1)は1回目の発話を、(2)は2回目の発話を示す。

表2 「奈良の」「由美と」におけるF0ピーク位置

項目 被調査者	奈良の	由美と
KG01 (1)	1-2 拍目	1-2 拍目
KG01 (2)	1-2 拍目	1-2 拍目
KG02 (1)	境界	2 拍目
KG02 (2)	2 拍目	境界
KG03 (1)	境界	2 拍目
KG03 (2)	2 拍目	境界
KG04 (1)	境界	1 拍目
KG04 (2)	1-2 拍目	2 拍目
KG05 (1)	1-2 拍目	1-2 拍目
KG05 (2)	境界	1 拍目
KG06 (1)	2 拍目	境界
KG06 (2)	2 拍目	2 拍目
OK01 (1)	1-2 拍目	2 拍目
OK01 (2)	1-2 拍目	2 拍目
OK02 (1)	2 拍目	1-2 拍目
OK02 (2)	境界	2 拍目
OK03 (1)	境界	1-2 拍目
OK03 (2)	境界	1-2 拍目
OK04 (1)	1-2 拍目	1-2 拍目
OK04 (2)	境界	1-2 拍目

大値の差について、100Hzベースで半音に換算したものを表1に示す。また、表2には「奈良の」「由美と」のF0ピーク位置を「1拍目」「2拍目」「1-2拍目」「境界」のいずれかで示した。「1-2拍目」とは、1拍目（「奈良の」の「な」または「由美と」の「ゆ」）内部で最大値に至るものの、その高さを維持したまま2拍目（「奈良の」の「ら」または「由美と」の「み」）に移ってから下降が始まるものである。「境界」とは1拍目と2拍目の境界のほぼ境界でF0最大値に達し、下降が始まることを示している。

#### 4 考察

##### 4.1 文中の文節アクセントの弱化について

図1に岡山方言話者OK03の、図2に香川方言話者KG02の音声資料を示す。いずれも、各方言話者の音声資料のなかで比較的平均的な発話である。

表1をみると、冒頭の「去年」の高さについては、岡山方言話者と香川方言話者の間で違いはなさそうである。また、「去年」と「奈良の」の差についても最大9半音(KG05)から最小プラス0.5半音（「奈良の」のほうが「去年」より高かった；KG01）と幅広く、地域の傾向としてはとらえにくい。

しかし、「奈良の」と「もみじを」の最大値の変化量に着目すると、3半音以上値が低くなっているのは20発話中6発話あり、そのうち4発話は岡山方言話者である。すなわち、「奈良のもみじを」において、「奈良の」が「もみじを」を意味的に限定しているため、「もみじを」のアクセントの山を抑えて発話している話者の比率が香川より岡山のほうが高かったといえる。香川には1名「もみじを」が「奈良の」よりわずかに高い例もみられた(KG05(2))。

さらに、「去年」と「由美と」の差に着目すると、3半音以下の差におさまっているのは7発話あ

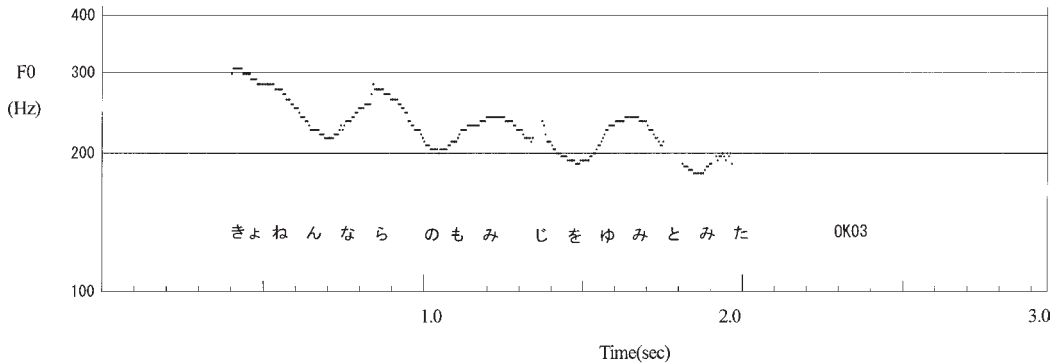


図1 岡山方言話者の「去年奈良のもみじを由美と見た」

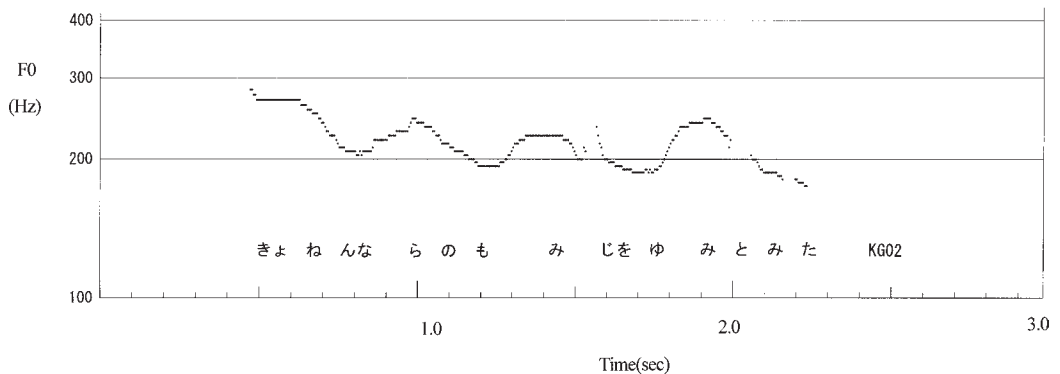


図2 香川方言話者の「去年奈良のもみじを由美と見た」

り、一つを除いてすべて香川方言話者である。すなわち、冒頭の「去年」に比べて最後の「由美と見た」のF0最大値がそれほど低くなっていないということであり、「奈良の」「もみじを」のF0最大値の差の結果ともあわせて、香川方言話者と岡山方言話者と比較した場合、文中のアクセントの弱化については岡山方言話者のほうがよくおこなわれている傾向があるといえそうである。

#### 4.2 「奈良の」「由美と」におけるF0ピークの位置

「奈良の」と「由美と」におけるF0最大値が時間軸上どのポイントで示されるかを観察したところ、今回の調査からは岡山と香川で明確な違いは見いだせなかった。郡(2003)によると、大阪方言話者はF0ピーク位置をモーラ境界に合わせようとする傾向があるということであるが、今回の調査では岡山方言話者の発話16発話中4発話、香川方言話者の発話24発話中5発話がF0ピークが1拍目と2拍目の境目(=モーラ境界)にあり、両者に差はなさそうである。強いて言えば、モーラ境界にF0ピークがくるケースは香川方言話者の場合は「奈良の」「由美と」の両方があるが、岡山方言話者は今回観察されたのは「奈良の」のみであったという点である。ただし、傾向として述べるにはサンプル数が少ない。

「奈良の」の1拍目にF0ピークが来た発話は今回は岡山方言話者にも香川方言話者にもなかったが、「由美と」については、KG04とKG05がそれぞれ1回ずつ1拍目でピークが観察された。

## 5 まとめ及び今後の課題

岡山方言と香川方言のイントネーションの特徴について、頭高型アクセントの語のみからなる文「去年奈良のもみじを由美と見た」の音声資料を分析し、考察をおこなった。岡山方言話者4名、香川方言話者6名の2回ずつ発話したものを対象とした。今回のデータは、香川方言話者のほうが岡山方言話者よりも文中で各文節のアクセントを弱化させにくい傾向があることを示唆する結果となった。いっぽうで、頭高型アクセントの語のF0ピーク位置についてははっきりした傾向はみられなかった。

香川方言が京阪式アクセントの地域であることを踏まえると大阪方言話者にみられるような第1拍目にF0ピークが来て下降が始まる話者がいることも予想されたが、郡(2004a)で高知の話者にはそのような傾向がみられなかったことが報告されており、同じ京阪式アクセントのグループであっても、その中で地域差が少なからずみられると考えられる。

今回は人数もさることながら、同じ話者に繰り返し発話してもらった回数も最小限であったため、今後追加調査をおこないより明確に岡山方言と香川方言の特徴をあきらかにしたいと考えている。

## 謝辞

調査にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

## 注

注1 平山(1982)による。

注2 山田・岡島・三浦(1982)、杉藤(2001)、郡(2004b)など。

注3 今石(2005)に付属。

## 引用・参考文献

今石元久(2005)『音声研究入門』和泉書院。

郡史郎(2003a)「東京っばい発音と大阪っばい発音—東京・大阪方言とも頭高アクセントの語だけから成る文を素材として—」『日本方言研究会第77回研究発表会発表原稿集』

郡史郎(2003b)「イントネーション」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』109-131, 朝倉書店。

郡史郎(2004a)「全国7地点の若年層話者の韻律の特徴—同じアクセント型からなる文を用いた微細な特徴の比較」『平成12-16年度文部省科学研究費補助金特定領域研究研究成果報告書領域番号746 韻律と音声処理 総括班 課題番号12132101』

郡史郎(2004b)「東京っばい発音と大阪っばい発音の発声の特徴—東京・大阪方言とも頭高アクセントの語だけから成る文を素材として—」『音声研究』第8巻3号, 41-56。

杉藤美代子(2001)「文法と日本語のアクセントおよびイントネーション—東京と大阪の場合—」音声文法研究会編『文法と音声III』197-210, くろしお出版。

平山輝男編(1982)『全国アクセント辞典 22版』東京堂出版。

山田達也・岡島秀夫・三浦一朗(1982)「アクセントの連続方法について—東京, 名古屋, 大阪の場合—」『音声学会会報』169, 10-14。